幼馴染の彼女はヤンデレ

セブンスランス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺は蘭と付き合っていた

とある理由で蘭は少しずつおかしくなっていった

目次

幼馴染の彼女はヤンデレ ―― 1
いつもと変わらないヤンデレ？ ―― 5
蘭と日菜 ―― 10
新たなヤンデレ…？ ―― 15
氷川姉妹の妹の様子がおかしいのだが…？ ―― 19
トラウマ ―― 24
行きも帰りもいつも一緒のヤンデレ？ ―― 28
助けて ―― 32
帰り道 ―― 36
目がさめるとそこは病院だった ―― 39
久しぶりのデート ―― 43
雨の日の憂鬱 ―― 48
やばい…どうしよう ―― 51
新たな、ライバル ―― 55
日菜　零　始めての… ―― 59
嘘だろ…おい ―― 63
夏の学校へ ―― 68
今日も何処かで ―― 72
始まりの季節、新たなる出会い。そして修羅場 ―― 74

幼馴染の彼女はヤンデレ

帰り道

零

「俺は…なんで…こうなってるんだ…」

蘭

「ねぇ…？なんで今日他の雌豚と一緒に話してたの？

あたし以外に近寄るなって言ったよね？」

零

「（右手にスタンガン…それに左手ですごい力で首抑えてるから苦しい

そして目のハイライトが…ない！これは完全に怒ってますね…）」

蘭

「ねぇ？聞いてる？

零ッ！」

零

「ッ！ま…て。

蘭落ち…つけ！」

蘭

「…分かった」

零

「う、ゲホっゴホッ…

たしかに他の女子と色々話してたのは謝る

すまん」

蘭

「次、また雌豚に近づいたら近づかれたらあたしはその女を殺すから、

例え、幼馴染の４人でもね…」

蘭は俺の頭を担ぐ

髪の毛が引っ張っていく感じで痛い

零

「っ…わかった…だから…離して…」

蘭
「…この先あたしの家だから
…じゃあね？レイ？」
零
「…また明日」
なんでこうなってるかというと
ざっと3年前に話を戻す
3年前
俺と蘭は恋人という感じで付き合っていた。
当時はお互い、恥ずかしく良く言葉を出せなかった。
蘭の幼馴染達は俺達が付き合ってる事を知っていて良く遊んで居た。
2年生に上がる頃、蘭達はバンドをやり始めた。
お互いに帰る時間が合わないためほどんどはすれ違いだった
そんなある日、俺は教室で勉強をしていた所を
女子生徒に話しかけられた
女子生徒
「ね？ちょっと来てくれる？」
零
「はい？…わかった」
俺は言われがまま、体育館の倉庫に行った
だが、それは彼女が俺を誘き出す罠であり
倉庫には5人の男子生徒が居た
理由は
蘭の事が好きだったが俺が蘭と付き合ってる事に嫉妬していたためだった。
それだけの理由俺は手や足などの自由を奪われ
血を吐くほどに殴られ、暴行を振るわれた
男子生徒
「いこうぜ？そもそも戻んねーとあぶねーし？」
賛成ー！という声が聞こえた

俺は酷く暴行をされたため意識がもうろうとしていた。
身体が動かなく気を失う直前
「ーー!?」
「おーーれ…!」
零
「あ…う…」
誰かが俺の名前を呼んでいた。
蘭
「零!!」
蘭
「…さない
許さない!ゆるさない!ユルサナイ!」
蘭
「ユルサナイ!ユルサナイ!!ユルサナイ!!!ユルサナイ!!!!ユルサナイ!!!!!ユルサナイ!」
蘭
「…ろし…殺してやる…コロシテヤル…!零を…あたしの大好きな零を暴行を振った罪…!
あたしの大切な人を傷つけた罪ッ!」
蘭
「ダカラ…マッテテネ?　次はカナラズマモッテアゲルカラ、レイ!」
その後目が覚めたのは病院で
看護師から話しを聞いたら全身血だらけになった感じで病院に運ばれて来たらしい。
幸い命別状は無いと聞かされたを
学校に行けたのは一週間くらいだった。
背後から、巴やモカ、つぐみ、ひまりがこちらに向かってくる
蘭はどうしたのかって聞くとみんな顔を揃えて

蘭の様子がおかしいという口を揃えて俺に伝える
学校に入り職員室に入り担任の所へ報告しに行った
担任は心配して居た顔でこちらをみる
零
「いえいえ、大した怪我じゃないのではい。心配お掛けしてすみませんでした」
担任
「いや、無事で何よりだ
所で君は聞いてるかな？」
零
「えーと？」
俺は担任の口から恐ろしい事を聞かされる
零
「…じ、自殺…？」
俺は開いた口が塞がらなかった。
詳しく聞くと俺が病院で入院してる時に
暴行を振った男子生徒や女子生徒が謎の死を遂げたと言う事。
零
「そう…でしたか…」
担任の話しを終えた俺は久しぶりのクラスへと入っていった
机の窓が奥側に蘭が窓を眺めていた。
零
「おはよー？蘭」
俺は蘭に挨拶すると蘭もこちらに向く…が
視線が凍るように冷たい表情をしていた
蘭
「…おはよ、レイ…」
蘭の目には光が消えていた。

いつもと変わらないヤンデレ？

俺は今家に帰っていた。
理由はｃｉｒｃｌｅで働いていた帰りだった。
もちろん蘭達のスタジオ練の付き添いもあるが
零の家
零
「あぅ…疲れたぁ～
さっさと寝よう…」
玄関で靴を脱ぎ
階段へと登っていく。
自分の部屋に戻り制服から寝巻きに着替えた。
ぴこーんと音がなり
スマホをみる。
蘭からＬＩＮＥが来ていた
俺はそれの内容を確認する
零
「…蘭だ…」
蘭
明日、一緒に学校行こ？
それとほかの雌豚に近づいたり、誘われたらしたら…分かってるよね？
零
分かった。
明日いつもの場所でいいよな？
蘭
うん、それじゃまた明日
ＬＩＮＥを終わらせた俺はシャワーを浴びて来る
次の日
玄関でバンバンと音が響く
おまけにピンポンまでもうるさい

俺はそれに目覚めてカーテンを、開ける
下には蘭が俺の部屋をずっと見ていた。
零
「…蘭か、今行く」
俺は制服を着替えて玄関に行き外に出る。
蘭
「遅いよ?零」
零
「あはは…少し寝坊ってやつだよ（本当はもう少し寝たかったけどうるさかったからな…）」
蘭
「ふーん?
行くよ?遅れる」
零
「お、おぅ」
俺と蘭は学校に向かって行く
その道中でパン屋でモカの姿を見かけた俺は話しかけようとした
だが、背後で蘭がパチパチと音がなる硬いもの（スタンガン）をバレないように俺の背中にくっつき少し電撃を食らう
蘭
「言ったよね?あたし以外に雌豚に近寄るなって?
ナンデヤクソクヤブルノカナ…?」
殺気を感じた俺は冷や汗をかき
ゆっくりと後ろを向いて蘭に返事を返す
零
「わ、悪い。」
蘭
「…次は加減しないから
それより速く行くよ?」
零
「分かったって（こりゃいくつ命があっても足りないな…）」

羽丘学園
巴
「蘭、零、おはようさん」
零
「おは、巴」
蘭
「おはよ、巴
あれ？ひまりとつぐみは？」
巴
「後から来るってよ。
それよりモカとか見なかったか？」
蘭
「モカはパン屋で見かけたよ
すごい行列に居たから話しかけられなかったけど」
巴
「そうか
そろそろ行こうぜ？」
蘭零
「分かった」
学校に入ると巴と俺たちは違うクラスのため
それぞれの教室に入っていく。
しばらくすると授業が始まり
みんなそれぞれの席つく。
昼休みになり俺は身体を伸ばしていた
するとスマホからＬＩＮＥの通知が来て中身を確認する
零
「…（ん？誰からだ？
…日菜先輩？）」
日菜
やっほー？
昼休みに私のクラスに来れる？

零
別に大丈夫ですけど、昼飯食べた後ですか？
日菜
うん、
それじゃお昼休みにまたねー
零
「…なんの用事だろ？」
蘭
「零、ちょっと手伝って欲しい事あるから来てくれない？」
零
「ん？あ、分かった。
何手伝えばいい？」
蘭
「これ、職員室まで一緒に運んで欲しいの」
蘭のテーブルには大量のプリントが置いてあった
職員室までプリントを届けたい俺と蘭は教室に戻ろうとした
その時、蘭に俺は腕を掴まされ誰も通らない階段辺りに連れて行かれる
蘭
「誰とＬＩＮＥしてたの？
答えて」
零
「だ、誰でも…ッ！」
蘭
「答えろ！」
蘭は俺を力づくで壁に押し込む
無理にどかそうと抗うが、彼女自身の力で押さえられてしまう。
蘭の目のハイライトはまた消えていた。
零
「ひ…日菜先輩からだよ…」
蘭

「日菜さんか、ちょっと見せてもらうよ」
蘭は左手から俺のポケットに入ってるスマホを取り出し
内容を見る
蘭
「…一人で行ける？零」
零
「い…行けるから…」
蘭
「…わかった。」
その後俺と蘭は少し遅れながらの授業に参加した
教室に入る前は蘭が俺の腕を掴みながら離れないように一緒に歩いたのであった。

蘭と日菜

蘭と教室に戻り授業を受けるそしてお昼休みになった
零
「ふぅ…終えた。」
蘭
「零、行くよ」
蘭が俺の机の前に立つ
手にはお弁当を持っていた。
零
「分かってると思うけど、お昼食べたら先輩の所に行くから」
蘭
「…分かった。
できる限り早く用を終わらせてね？」
零
「できる限り終わらすから
ね？行こ」
机から立ち上がり、教室を出ようとする、
蘭は俺に抱きついてきた。それでも構わず俺は
教室から出るとモカ達と合流し、弁当を持っているのを確認し
6人で屋上に行き、お昼ご飯を楽しんだ。
モカも幼馴染であり、よくお昼は一緒に食べることが多い。
零
「それじゃ俺、用事あるからごめん」
モカ
「りょかーい」
零
「それじゃ蘭、行ってくる」
蘭
「…うん」
屋上の扉を閉めて行き、俺は教室に戻っていった。

巴
「蘭、心配するのは分かるが少しは落ち着けって。
零なら大丈夫だって。」
蘭
「そうだね
それより、今日のスタジオ練の話だけど…」
蘭
「(本当は零を一人に行かせたくない、例え先輩でも…。虐められたら、あたしは…絶対に虐めた人を許さない
本当は零を一人で行かせたくない…)」
蘭
「…ぁ…」
つぐみ
「蘭ちゃん?どうしたの?具合でも悪いの?」
蘭
「ッ!なんでもないよ、
気にしなくていい。」
ひまり
「え?大丈夫なの?蘭?」
蘭
「なんでもないからッ!」
全員
「!?」
巴
「蘭?ほんと大丈夫か?」
蘭
「…ごめん少し頭冷やしてくる」
あたしはその場から立ち去る
その後ろであたしの名前を呼んでいたが、それを無視した
モカ
「蘭?」

ひまり
「あ、蘭！」
つぐみ
「蘭ちゃん…」
巴
「アタシ達も様子見に行ってるか？」
つぐみ
「うん、なんか心配だよ！」
巴
「それじゃ行くぞ！」
零サイド
２ーＡ組
零
「ここだよね？」
教室の窓から先輩がいるかを確認するがその姿が見えない。
あたりを見回す、すると
「あー！零くーん！」
後ろからとっさに飛びつかれ、一瞬バランスを崩すがすぐに体制を整える
零
「日菜先輩、こ、こんにちわ…」
日菜
「んーーいい匂い、これってアロマの香り使ってるよね？」
零
「（え？挨拶はスルーなの!?）え？そうですけど…
良く分かりますね」
日菜
「うん、だって遠くに居て零君の匂いだってわかるもん！」
零
「えっ？あ、そ、そうですか…
それとご用件ってなんですか？」

日菜
「あ、そうそう、今日の放課後空いてる？」
零
「放課後なら空いてますけど…」
日菜
「だったらアタシとデートしようよ！」
その瞬間、零は固まった
零
「ええ!?で、デートですか。
で、でも、僕…デートなんて…」
日菜
「ダメなの…？」
可愛らしい瞳でこちらを見る
その誘惑に負け、俺は承認した
日菜
「うん、それじゃ放課後、校門で待ってるねえ♪」
零
「あぅ…どうもあの先輩は…はぁ…しかもデートって…これは…やばい」
考えながらも俺は教室に戻るのであった。
蘭サイド
あたしは零が心配だったから途中で零の所に行った。
だけど零が…零があたし以外の女とデートなんて…
蘭
「…とめない…」
蘭
「認めない認めない！認めない!!」
蘭
「あは…アハは…」
蘭
「…零はあたしの者だから…例え先輩でも…ユルセナイカナ…」

蘭
「…考えないと…あたしと零を邪魔する雌共を」
日菜サイド
日菜
「ふふふ…誘っちゃたよ、零君の事デートに♪」
日菜
「だからね、蘭ちゃんには悪いけど…」
日菜
「零君はアタシの者だから♪」

新たなヤンデレ…？

日菜先輩にデートに誘われて、少し驚いている俺は教室に戻り
そして放課後になった。
蘭は速攻でこちらに近づき、日菜に抱きつかれていたところを見られていた。
蘭は俺の事を心配する、俺は大丈夫だよと伝え蘭に安心をさせる
その後、蘭はＡｆｔｅｒｇｌｏｗのメンバーとスタジオ練に行ったのであった。

羽丘学園　校門前

日菜
「遅いよー！零くーん？」

零
「すみません、少し教師と話してまして…」

日菜
「そうなんだー
零君、どっか行きたい場所ある？」

零
「え？そ、そうですね…」

零
「（ま、まずい…行きたい場所なんてないし…でもな…）」

日菜
「？どーしたの？お腹痛いの？」

零
「あ、そうだ映画行きません？
今やってる映画観に！」

零
「（映画行けるかなこんな時間から？）」

日菜
「うん、いいね♪早速いこ？零君」
日菜先輩は俺の腕を引っ張り、勢いあまりに走っていく

零
「うぁぁぁ!!!」
ショッピングモール
映画を観に終わり、外に出る
日菜先輩は気分がすごく良かった。
俺は…少し疲れた、てか来る前から腕引っ張りだされて気持ち悪く映画を観る集合がなかったためだ。、
日菜
「大丈夫？零君？気持ち悪い？」
零
「いえ、大丈夫です…それよりも他に行きたい場所ありますか？」
日菜
「うーん？そうだ、駅前に何か面白い事やってたような気がする行ってみよ？」
零
「そうですね、では、行ってみましょうか？（面白い事って何かやってたっけ？）」
駅前
零
「これは…イルミネーションですね？」
日菜
「うん、零君と一緒に見たかったからさ」
駅前にたどり着くとライトが着く前のイルミネーションにたどり着く。
あたりはすごく真っ暗で、街のライトがついてるくらいだった。
日菜
「ねぇねぇ！一緒にカウントダウンしよ？」
零
「え？カウントダウン…って」
言い切る前に日菜がカウントダウンを言い始めたので俺もそれに合わせていう

タイミングが良かったのか
カウントダウンを言い切り、その瞬間、イルミネーションのライトが一気に点灯する。
日菜
「うぁー！・綺麗だね！」
零
「はい、これほどまで綺麗だと心が奪っていく感じだよ…ん？」
一瞬日菜の顔が怖くなった気がするが…気のせいだろうか？
少し黙ってた日菜は口を開ける
日菜
「なんで、あの「こころ」が出てくるの？
ねぇ？」
なんていうか、勘違いが酷すぎる
俺は「心が奪っていく感じだよ」しか言ってない…って、あ。
確かに名前が入っている…
日菜
「ネぇ？なんであいつの名前が出てくるの？
あいつのことは忘れてあたしだけ見ててよ！」
零
「ちょ、ちょっと待て！日菜先輩
勘違い…じゃなくて誤解してますって！」
その後、なんとか日菜に誤解だと言いつけて
落ち着かさせる。
帰り道
日菜
「今日はありがとうね、楽しかったよー♪
また、デートしようね？」
零
「あはは、また明日学校で会いましょう日菜先輩」
日菜
「うん、それじゃーねー」

日菜先輩と別れ
家に帰っていく、その後ろから誰かに追いかけられているのに気付く
零
「はぁ…誰ってうっ!?」
強い衝撃を受け、気を失う
気を失う前にどこかで聞いた事がある声がしたが
そのまま倒れこむように意識は遠くなる
「フフ…捕まえた♪
…渡さない…ワタサナイカラ…ね？
れ…ん…♪」
次に気がついた時は真っ暗な部屋に居たのであった。

氷川姉妹の妹の様子がおかしいのだが…？

あたりは真っ暗な部屋にいることはわかる
だれの部屋なのかは知らない、だけどひとつだけわかることがある
俺の股に誰かが載っていることを
零
「（くっ、鎖みたいなもので繋がれていて身動き取れない！
それに誰だ？俺の上に乗ってるの…？）」
少し経つ目が慣れてきて、その様子を伺うと
そこには
日菜
「あれ？起きた？零君♪」
日菜先輩が微笑みの笑顔でこちらを見ていた。
時間は遡り
???サイド
「どこにいるのかしら？日菜は？」
蘭
「あれ、日菜さんのお姉さん？」
巴
「紗夜さんじゃないですか、どうしたんですか？慌てた様子で？」
つぐみ
「何かあったのか、教えて貰えませんか？」
紗夜
「ええ、実は…」
少女説明中
紗夜
「…って事です」
ひまり
「つまり、イルミネーションを見にきていた、日菜先輩が迎えにきてとＬＩＮＥが来たので迎えに来て、探しても姿が見えないって事ですよね？」

蘭
「(…零と一緒にじゃなくて…もしかして…？)」
紗夜
「はい、なのでさっきから連絡を取っているのですが…」
モカ
「ふーむ、これは難事件ですな～」
蘭
「…」
つぐみ
「蘭ちゃん？どうしたの？なんか真剣な顔してるけど？」
紗夜
「美竹さん？どうかしましたか？」
モカ
「おやおや～？もしかして何か閃きましたかな～？」
巴
「モカ、なんの役やってるんだ？」
モカ
「刑事風～」
蘭
「モカ、みんなごめん
紗夜さん、もしかしたら日菜さんは…」
そして、今現在
零
「こんな姿、氷川さんのお姉さんが見てびっくりすると思うから降りてください！」
日菜
「ネェ？」
日菜は俺の耳元で小さく呟く
日菜
「敬語なんて馴れ馴れしいから、普通に蘭ちゃんみたいに喋ってみてよ…？」

零
「…日菜…さん…？」
日菜
「さんはいいから!!」
零
「ぐっ！がは?!」
部活で鍛えた腹筋が貫く。
その衝撃に耐えられず、少し咳込む
日菜
「ナンデ？蘭ちゃんみたいに話かけないの？
ネェ？聞いてる？」
零
「ひ…な…」
意識がもうろうとする、さっきの衝撃で半分気を失いかけている。
日菜
「…だったら…ネ？」
そういうと日菜は俺の上着を巡り
ポケットから何かを取り出した
零
「そ…れは…」
日菜
「刃物だよ
殺戮能力はないから零の体に切り刻むんだ…「アタシ」の名前を…
ネ？」
恐ろしいことを口にいう日菜
これまでかと諦めていた瞬間。
紗夜
「日菜？帰ってるの？」
日菜
「…あーあ、お姉ちゃん帰ってきたみたい…それにもう一人…じゃな
いけど外に四人くらい誰かいるみたいだね」

零
「…」
日菜
「あ、寝ちゃった
丁度いいや、蘭ちゃん達に送ってもらおうかな?ふふ♪」
氷川家
紗夜
「それでは、新一さんの事、よろしくお願いしますね美竹さん」
日菜
「またねー♪」
蘭
「それでは失礼します」
帰り道
巴
「にしても、日菜先輩を送っていくついでに貧血で倒れたから紗夜さんの帰り待ってたなんてな」
ひまり
「凄いよね、私だったら絶対に緊急車呼ぶもん」
つぐみ
「私もひまりちゃんと同じ事やりそう…」
モカ
「蘭〜?さっきからどおしたの?」
蘭
「(ＬＩＮＥを紗夜さんに連絡をしたのは日菜さんと零が一緒に居られる時間を増やした?貧血で倒れたなんてあれは日菜さんの嘘
だって…零は貧血で倒れたなんてしない。)」
つぐみ
「蘭ちゃん?」
蘭
「…え?どうしたの?」
巴

「いや、蘭が難しい顔してたからどうしたのかなって思ってさ」
蘭
「なんでもないよ、それじゃあたしは零を家まで送ってくから」
モカ
「またね～」
通学路　蘭　零サイド
蘭
「（ユルサナイ…日菜さん…いや、ヒナ
…次、また零に酷い目に合わせたら…次は容赦しないヨ？）」
蘭の目はほんのすこしだけハイライトが消えていた。

トラウマ

両手には、鎖見ないなもので縛られており
自由を奪われていた。
そんな中、俺の上には誰かが乗っていた。
零
「やめろ…日菜…！」
日菜は微笑みを浮かべながら、刃物を自分の腹を切る
見えてはいけないものが零の目にはっきり映り出す
腹からは生臭い…否
血が止まらない程、俺の上着にこびりつく。
日菜
「アハ♪、見てみて…アタシノ血だよ…零君！」
零
「ひ…な」
俺はただ名前を呼ぶ事でしか出来なかった。
その時だ、日菜が持っていた刃物が、俺のお腹にめがけて
突き刺し、腹をえぐるように腹わたを切り込む
零
「(?!?!)」
それは言葉が出ない程の衝撃で
そして、日菜はそのまま俺の上で倒れこむ。
日菜
「コレカラモズット…一緒ダネ…♪」
零
「(痛い…痛いッ！誰か…嫌だ…こんなところで…死にたくない…誰か…助けて…ら…ん)」
死にたくないと、気持ちだけで精一杯だった。
だけど、意識はだんだんと遠ざかっていき。
そして。
零

「(はぁ！　はぁ!!　はぁ!!!?)」
あ…死んだ…
零の家
零
「うわぁ!?
はぁ…はぁ…俺は…何を…?うっ!?」

俺は気持ち悪くなり、急いでトイレに駆け込んだ。
数分後
零
「(俺は確か、先輩とイルミを見に行ってた、それから誰かに襲われて、気がついたら先輩の家に居た。それから…それからどうなったっけ?てか、リアルで自分の内臓や、先輩の内臓を見てしまうって…それと、ここ…俺の家だよな?誰が家まで送ってくれたんだろ?)」
考えてるとキッチンの方から声がする
蘭
「起きたんだ、零。おはよう」
エプロン姿をした蘭が居た。
零
「蘭、おはよう。その前になんでここに?」
蘭
「覚えてないの?
昨日あたしが、零に忘れ物届けに来たら道で零が倒れてたから
家まで送ったんだよ?」
零
「そうだっけ?あはは、ごめん忘れてたみたいだ(あれ、イルミ見た後に先輩に襲われたけど、その後に先輩の家だったはず…え?じゃどうやって帰ってきたんだ?)」
昨日のことは自分でも覚えてない、家に帰るまでは覚えているのだが。

零
「ん？ちょっと待って、家まで送り続けたなら蘭、親とか心配してないの？」
蘭
「それなら、大丈夫だよ、父さんにちゃんと理由を言ったから。」
零
「そうなんだ…ふぅ…」
蘭
「？大丈夫？零
…それよりご飯出来てるよ？」
零
「え？あ。うん行こっか？」
食卓
蘭
「（良かった、いつもの零だ、あの人に何かされたかと思ってたけど、なんともなさそうだね）」
零
「うん、美味しい、凄いな、蘭。料理上手いよ」
蘭
「そ、そうかな。零が喜んでくれるとあたしも頑張った甲斐が…あるかな…」
零
「うん、あ、でも味噌汁になんの具材入れたの？かなり苦味感じだけど？」
蘭
「え？普通に味噌入れただけだけど？
変？」
零
「いや、変じゃないけど、…まぁ、たまにも変わった味付けしたんだろうなって思ってさ」
蘭

「そうだね、「変わった」味付けしたからね、気に入ってもらって良かった。」

蘭

「（あたしの血が混じってる、特製の血味噌汁味だけどね）」

行きも帰りもいつも一緒のヤンデレ？

次の日、蘭は俺の家に来て一緒に学校へ行く事になった。
登校してる間、蘭はずっと俺の腕にしがみついたまま、共に歩いていた。
零
「蘭、そろそろ離して…暑いから…」
蘭
「あたしが寒いからもうちょっとだけ良いよね？」
零
「分かったよ…もぅ」
学校についても蘭は離れず、教室に着いた時には
離してくれたようだった。
普通に授業を受け、そして昼休みになる頃
俺は蘭にお弁当を一緒に食べようと言われ
一緒に屋上へと向かう事になった。
屋上
蘭
「はい」
蘭は自分で作ってきたと言うお弁当を俺に見せる
色とりどりの鮮やかなお弁当の中身が入っていた。
零
「頂きます」
パクッと一口食べると中はとろーりしていた
チーズでも入れたのかなと思い、蘭に聞く
蘭
「うん、チーズも入れて見たよ？美味しい？」
と、蘭は聞いてくるので美味しいと答えると
蘭は喜んでいた。
しばらくすると巴達が屋上へやってきて
幼馴染で一緒に食べる事にした。

夕方
蘭
「零、帰るよ？」
零
「ちょっとまってぇ～
…よし、ってあれ？蘭、スタジオ練は？」
蘭
「みんな都合悪くて今日は来れないみたい」
零
「ん…了解した、帰ろ」
帰り道
蘭
「…」
零
「…」
蘭
「ねぇ？」
零
「はい!?」
蘭
「そんなに驚く事じゃないよね？」
零
「え？いや、別に…」
蘭
「ダメダヨ…アタシ以外の事をカンガエタラ…サ？」
蘭の目はまたハイライトが消えてこちらを見てくる。
どうしても零は蘭の目をそらす事が出来ない、むしろ出来るはずもない。
蘭
「…今日、あたしの家に来ない？
父さんと母さん、今日は華道の事で遅くなるみたいだから」

零
「え…あ、はい…」
蘭
「(アハ…ナニシテ零をアタシノモニシようかナ?
誰にも渡さないアタシだけの…ネ?)」
蘭の家
蘭
「お茶入れてくるから一歩も動かないでね?」
妙なことを言い残し蘭は部屋を後にする
零
「とは、言われたものの…」
蘭の部屋は目の前にアンプ2つ置いてあり真ん中にパソコンがある。
前に来たよりも部屋の中は綺麗だった
蘭
「おまたせ、…何してるの?零」
零
「いや、なんでも」
蘭
「…そう、お茶にしよ?」
蘭が持ってきた、和菓子をいただく
甘い食感で口の中は溶けていく。
お茶をすするとなんだが苦味を感じる。
零
「苦…それになんだ…ポカーンとする…」
蘭
「どうしたの?零」
零
「…いや…んでも…ない…」
バタリと意識を失う。
その様子を見ていた蘭は零を担いでベットに運ばれる

蘭

「ズット…イッショダヨ…レイ♪」

気がつくと部屋は暗くなっており。

起きようとすると両サイド何かに縛られてていた。

助けて

蘭の家　部屋

零

「(動けない…蘭の仕業なのかな…にしてもあのお茶に睡眠薬を入れなんて…)」

蘭

「あ、起きたんだ

オハヨウ、零」

零

「おはよう…じゃない！

両サイドの付けてる手帖外してもらいたいんだけど？」

蘭

「いやだよ…なんで？ナンデ？」

零

「(やべ、地雷踏んだか…？)」

蘭

「どうせ、直ぐに逃げるんじゃん

アタシイガイの雌豚達には近寄せサセナイ!!

零はずっとアタシと一緒に…！一緒に!!イッショニ!!!」

感情が抑えられてないのか蘭の声がだんだん大きくなっていく。

このままだと危ないと感じた零は蘭に説得する

零

「分かったから！俺は二度と他の人についていかないし！

ずっと蘭のそばにいる！だから、落ち着け！」

蘭

「…！ホント？本当なの？

零…あたしから離れないでね…」

零

「分かった…んっ!?」

蘭が急にキスをし、強引に舌を零の中に入れる

零と蘭の体液が交わっていく。
零
「んんんんん!?!?」（やばい窒息する!!）
足をバタバタしたいが足が固定されていて身動きが取れない。
しばらくすると、蘭は零の口から離れていく
零
「はぁはぁ…死ぬかと思った…」
蘭
「ふふ…これで約束したからね…ずっと…あたしと一緒にいるって…サ？」
零
「…（そういう事…か）」
その後蘭と約束をした後、両サイドについていた手帖が外されていく。
蘭
「家まで送ってくよ？」
零
「（断る理由もないからな…いや、あるけど言ったらまた繰り返し出しな）分かった、頼むよ」
蘭
「少し寒いかな…」
零
「夜は冷え込むからな、ほら羽織っておけ」
蘭
「ありがと」
道なりに進むと零の家が見えてくる
家にたどり着くと蘭と別れを告げ家に帰る
零
「ふぅ…酷い目にあった…風呂でも入ろっと」
風呂に上がり、冷蔵庫に入っていた。りんごジュースを取り出しそれを飲む。

零
「ぶはぁ…美味しい…ん？」
冷蔵庫の奥に見覚えのないタッパーに詰め込んだ物があった。
零
「なんだこれ？
…湊友希那…？」
はて、なぜここに湊友希那と書かれたものがここにあるのか
零は考えた。
するとある答えを思い出す。
零
「そういえば、初めてＲｏｓｅｌｉａの練習の時にあって
それから少し話しするようになって…そっから湊さんから
貰ったんだっけな…忘れてたよ」
零
「確かつくだ煮が入ってるって聞いたな
まだくえ…」
タッパーを開けると生ゴミみたいな臭いがし
直ぐにタッパーを閉じ、袋二枚重ねに包みゴミ箱に捨てた
零
「嘘だろ…一週間経ってないのになんであんなに腐ってるんだ…
うっぷ!?」
トイレに駆け込み吐いた。
しばらくして、落ち着いて寝るのであった。
次の日
蘭と一緒に学校にいく途中
白髪の少女を見つける
直ぐ近くだったため、挨拶をした
友希那
「あら、おはよう
美竹さん、新一君」
蘭

「おはようございます、湊さん」
零
「おはようございます」
蘭
「あたし達先に急ぐので、行くよ?零」
零
「では、すみません」
友希那
「ええ、またね」
友希那
「…フフ…カワイイ…ワネ…」
友希那の目は少し曇りを指していたが。その時の零はまだ気付かなかった。
それはまた、新たな人が一人。零を見ていたことを…

帰り道

数日後経った、放課後
零は帰る準備をしていて、教科書などをまとめて整理をしていた。
後ろ横から女の声が聞こえ、零は振り向く
黒と赤いメッシュが入った少女、蘭に話しかけられる
「どうしたの？蘭」
「ごめん、今日スタジオ練があって帰れそうにない」
「あ、そうなんだ
気をつけて行って来て？蘭」
「うん
また、あとで連絡するから」
後ろの扉からおっとりした声が聞こえて来た
モカ達が蘭を迎えに来た様子だった。
蘭は小走りでモカ達のところは向かっていき
別れる直前に手を振り、蘭を見届けた
「よし、帰らないと」
通学路
ゆっくりと一人で帰っている零は、どこかで鳴き声が
聞こえて来て、零はその方角へと向かう
公園に着くと大きな男子生徒達が三匹の子猫達を虐めていた。
とっさに零はその男子生徒にむかう
「おい！やめろ！」
と、零は声を上げ、男子生徒達がそれに気づく
その一人がニヤニヤしながら零に近づく
「あー？テメェ？なんのようだ？あん？」
「子猫いじめるテメェがいけないだろうが？」
残りの二人も零に近寄る
零は表では怒りを表しているが裏では怯えた状態だった。
「なんかいえよ！おい！」
急に胸ぐらを掴まれて零は一瞬の隙を突かれてしまい

相手の手を振りほどこうとするが、例の後ろに二人の男性達が
暴れる零を抑え込む
「ぐっ！は…なせ！」
「チッ気に食わねーんだよッ！」
思いっきり男子生徒の拳が見事に零のお腹を
電撃が走るような痛みを感じ、零はその痛みに耐えられずに
少し血を吐く
「(やばい…見事に入りやがった…)」
「おいおい…もうその程度なのか？あぁ？」
さらにもう一発零のお腹を殴る男子生徒は
それからも殴り続けて
零の意識はだんだんと失っていく
「おい、そろそろ辞めようぜ？
また、サツにお世話になりたくねーしよ」
「そうだな
あーあ、シラケちゃったよ、おまけに子猫ちゃん達と遊ぶのも飽きたし」
「あ、帰りにファミレス寄ってこうぜ？ｗ」
３人の笑い声がだんだんと遠くなっていく
その中で一人、誰かが零の近くに寄ってくる
「あ…」
意識が朦朧としてるなかで零は
少しずつ上を見る、
スカートだろうか、必死に誰かが零の名前を呼んでいた
「零！」
「ら…ん…？」
零は彼女の名前を口にした瞬間、そのまま意識を失う
段ボールに入っていた三匹の子猫達が零ともう一人の人に近寄る
「…私は美竹さんじゃないわ」
そう呟き、白髪の少女はスマホを手にとり
緊急車を呼ぶ。

彼女の下には三匹の子猫達がその少女の足にスリスリしていた
「…ふふ…アハ」
「…大事な人を痛めつけた罪…
許さない…」
「…そうダわ
あいつらに黒い薔薇をあげようかしら…私の復讐として…ネ？」
彼女の笑顔…否
彼女は目が笑ってるはずもなく、目が曇っている
そんな表情をして、倒れている零をずっと冷たい目で見ていた。

目がさめるとそこは病院だった

零が意識を失ってから、私は零の側にいた。
しばらくしてから、救急車のサイレンの音が聞こえて来て
救急隊の人達が零を移動するベットに乗せて運び
私は彼（零）の側にいて、右手を握り締めながらも側にいつつけた。
病院に着くと零は救急隊の人達に運ばれていき
とある、病室で点滴を打ち、零が目をさめるのを待っていた。
零サイド
俺が意識を失う前に誰かが俺のところに来て心配そうな声で話しかけてくる。
最初は蘭だと思っていたが、蘭はスタジオ練があると零に
直接言ってたため、彼女ではないと確信した。
じゃあ誰が零の近くに来たのか
それは俺がちょうど意識が戻った時に蘭がタイミング良く病室に入って来た時だった
「ッ！蘭！」
いきなり、抱きついて来た蘭の目は真っ黒に染まり
ある人の名前を小さく呟く
「…湊さんの匂いがする…」
「えっ？」
次の瞬間、蘭はポケットに隠し持っていた
パチパチとなるぶっとい物を零のお腹あたりに留めた
「ナンデ？湊さんの匂いが零からスるノかナ？
あたし以外に関わるなって言ったヨね？」
顔が笑っていない蘭の目を見た零は
見覚えもないと答えるが蘭は零の顔を近くいていく
「ウソ、だって零の近くに湊さんの匂いが嫌でもあたしの鼻に入ってくるからネ？」
「いや、本当に見覚えッ！」
もう一度蘭に応えようとするが

お腹にあったパチパチが、零の身体に響く。
一瞬気を失いそうになったが軽い電撃が走っただけで済んだ
「次は容赦なく殺っちゃうから」
蘭の目は光を灯してない状態で
いつまたスタンガンでやられてもおかしくない状況だった。
落ちつきながら零は、蘭に事情を説明する
「…蘭、聞け
俺は男子生徒達が猫を虐めてる所を助けに行ってただけだ。
それに俺はなすすべもなく、その3人に殴られた
意識が失って、それから目がさめるとここに居たんだ
だから、仮に湊先輩が俺に近づくか？普通」
「…嘘っぽい感じもするけど…そうなの？」
「嘘なんてつくか、少なくても俺は気を失ってたから誰か連絡してくれたおかげで俺は今ここにいると思うよ？」
考え込む蘭はすぐに危ない物をポケットにしまった。
すぐに零に謝る、蘭の姿。
「ご、ごめん…急に」
「いいって事よ
でも、心配してくれてありがとうな？」
「べ、別に心配なんてしてないから！」
蘭と会話をしていると医者が入ってきて
色々と検査を行われた。
身体には異常を起こしてないといわれ
様子見で明日まで、一日入院することになった。
「そろそろ帰った方が良いよ蘭」
「ん…そうだね。
明後日学校で会おう、零」
「おうよ！
それとたまには蘭の手作り弁当も食べたいかな？」
「えっ？あ、うんわかった。
明後日楽しみにしててね？」

蘭はベットの横に置いてあった椅子を机の下にしまい
蘭がドアのところに手を開けて、零に向かって手を振り
彼女と別れた
蘭サイド
あたしは零がいた病室を出て、すぐに家に帰ろうとした
だけどあたしは少し気になることがあってある場所に向かっていく
公園
「ここに捨てられてた段ボールと猫達が居ない
それに零は3人の男子生徒に子猫を助けた
それで零は油断して3人に殴られて
それから意識がもうろうとしてる時に誰か来て零を助けたと…」
蘭は少し考えてそして
ある一つの答えを導き出す
「…アア、だから
だから「湊友希那」の匂いが嫌でも零の身体に付着してたんだ。」
「…ワタサナイ…零は…アタシノ者だから、アタシだけの彼氏…」
友希那サイド
私は零を虐めたという三人組を追っていた
彼らは人気の少ない所にいる事を確認した。
なぜわかったかって?それは…
「リサ…ありがとうね」
裏手の協力者リサのおかげですぐに三人組を
見つけることができた。
私は少しずつ三人組の所へ向かっていく
「おっ?おい見ろよ、孤独の歌姫がいるぜ?」
どうやら、三人は私の事を知っている顔でこちらを見てニヤニヤしながらこちらに近づいてくる、正直言って気持ち悪いしか言いようがなかった。
「お嬢ちゃん、ダメだよ～こんな所に来ちゃたらさあ!」
「…」

「…零…マッテテ…邪魔者は…スベテ私が…」
「消してあげるからネ」
その後、３人の男達の声が響いたらしいく
３０分後、意識は失っている状態で見つかり、病院送りされた。
目が覚めた男達に聞くと、全員が言いたくないと、頭を抑えながら
震えた声で言っていたという事を

久しぶりのデート

休日。零は、蘭ある場所へ向かって居た
駅前の近くの時計前に待ち合わせをしていた
が、零は少しねぼうをしていて、急いで走っていた
「はぁはぁ…疲れた…やばいちょっとでも遅れると蘭が怒る…」
目的地の場所にたどり着くと、蘭が腕を組みながら
少し不安そうな顔で零の事を待っているようだった。
「お、おまたせ蘭…待った？」
「ううん、あたしもさっき来た所だから
息切らしてるけど、何かあったの？」
「ふぇ？いや、遅刻したから急いで来たんだけど…あれ
待ち合わせって９．３０じゃなかった？」
「いや…１０時に待ち合わせしようって言ったの零だよね？
腕時計見せてほら」
蘭は零の左手に付いている腕時計を見る
それから蘭のポケットからスマホを取り出し、目の前の時計台をみると、零の腕時計が３０分遅れてるのが分かった。
零は恥ずかしさあまり、目を晒す
「うう…今度から気をつけます…」
「もう…ほら、行くよ？」
蘭は零の手を繋ぎ、
二人は、遠くの街に出かけるため
駅前に向かう。
電車に乗ると中はそれほど人が混雑してるというわけでもなく
人が座れるほどのスペースは何ヶ所かあり
零達は空いている席に座る
「なんか、久しぶりだね零とデートするの」
「あはは、色々あったからね
まさか俺が見たかった映画のチケットを取って
それから観れるなんて思いもしなかったよ

ありがとうね、蘭」
蘭にお礼を言うと蘭は、零の目を見ずに顔が赤らめていた。
顔を合わせない蘭を見た零は、蘭のほっぺを突っつく
それに驚いたのか蘭は一瞬だけピクリと反応した
「ちょっと…恥ずかしから辞めてよ…零」
「ごめんごめん、つい蘭の反応が面白くてさ」
「もう…零のバカ…」
たわいのない会話をしてるうちに目的地に到着し
零達は電車から降り、改札駅に出る。
改札から出ると沢山の人達が道を歩いていた。
「すごい人混みだな、蘭？
離れないように手繋ぐか？」
「えっ？あ、うん…」
蘭は零の手を繋ぎ、零は蘭の手をエスコートして
目的の場所へと向かっていく。
映画館の前にたどり着き、映画のチケットを受付の人に渡して
中に入っていく、上に上がっていき、ソファを蘭に座らせて
一息着いたのであった。
「なんか、買ってくるけど蘭は何か欲しいやつあるか？」
「あたしはなんでもいいよ
零が好きなの買ってきてもいいから」
「ん…じゃ…ポップコーンはキャラメル味？それとも塩味？」
「え、…キャラメル味で良いよ」
蘭の欲しい物を聞いた零はカウンターにいき
店員に注文する。
しばらくお待ちくださいと言われ人が邪魔にならないところに移動する
待っている時間を潰すためにスマホをいじっていた零は
横から通る人に気付かずにぶつかってしまった
「あ、ごめんなさい
お怪我ありませんか？」

「大丈夫ですよ
すみません、俺がちゃんと見てなかった原因でそっちもお怪我ありません？」
薄い茶色の髪をした女性にぶつかった零は
怪我をしてないか聞くとぶつかった本人は大丈夫であり
軽く挨拶して、その場で別れた
カウンターから声が聞こえ、零は小走りでカウンターに向かい
商品を持ち蘭のところへ向かう
「お待たせ、蘭」
蘭の所へ戻った零はソファに座っていて
イヤホンで音楽を聴いている蘭の姿を見た
蘭はそれに気付き、イヤホンを外し
ポケットにしまった
「お帰り」
零は商品を持ったまま蘭の左に座り
映画が始まるのを待った。
「ねえ？」
「ん？どうしたの？」
「…さっき別の女に当たってたけど零の知り合い？」
蘭は小さな声で零に質問する
さっきの所を見られてたのかと思い
零は蘭に説明する
「…ソう…」
その後映画が始まる時間となり
蘭達はスクリーンの所へ向かい指定された場所へ向かう
一番左の後ろ側に席に向かう
席に座りしばらくして点灯が暗くなり
目の前にある大きなスクリーンが映し出される
「おぉー！」
「（零ったら子供見たい、目キラキラさせて
可愛い…）」

時間はあっという間に過ぎていき
映画の上映は終わり、零達は席に立ち上がり
会場を出て行く
廊下にはスタッフさん達がお客のゴミを入れる袋など持ち運んでいて、零や蘭もその中に入れた。
時刻は夕方になっており。
近くのカフェで蘭達はそこで休暇をする事にした。
「迫力があってすげーよ！あれ！
蘭、ありがとうな！本当に」
「良かった、あたしも楽しめたよあの映画」
映画で観た内容を熱く語る零の姿を見る蘭は
しばらく話を聞いているのであった。
カフェで休憩を終え、
駅に向かう途中、蘭が一度立ち止まり後ろを振り向いた
零もその場で立ち止まり、蘭の姿を見る
「どうした？蘭」
「見て、零…綺麗な夕焼けだと思わない？」
蘭が指指す先には夕焼けが見えていた
「街中の夕焼けがこんなにも綺麗なんてな
…そうだ、一枚だけ撮っとくか？写真」
「うん…そうだね」
蘭と零はお互いに近づき二人が写真に収まるように
身体と身体をくっつき合わせて、夕焼けが真ん中に映るような
感じで零の手にはスマホを持ち、一二枚の写真を撮った
その後、電車に乗り込み、さっき撮った写真を蘭に送る
蘭本人は嬉しそうな表情を見せていて、零と一緒にホーム画像を
一緒にした。
いつも通りの場所へと帰ってきた零達は
蘭を家まで送って行き、また明日学校でと
蘭と言い残して、零も家に帰っていった
蘭の家

「…レイ…ズット…一緒ダよ？」

雨の日の憂鬱

雨の日、お昼頃。傘を忘れた俺は、急いで学校から家に帰っていた。
蘭は、華道の事で忙しいと理由で帰らないと言われたため。
他の人も誘うとしたが、知り合いがみんな用があるという事で
零は仕方なく帰ろうとしてが、タイミング悪く雨が降り始めて来て
慌てながらも、家に帰るのであった。
「ふぅ…ひどい雨だ
タオル、タオルっと」
玄関に入り、靴を脱ぎ
洗面台の所に向かい、タオルで濡れた頭を乾かす
風呂にお湯を入れてる間に、零は昼飯を作っていた。
「朝、大目に作っといてよかったな…味噌汁」
朝に作っていた味噌汁を温めている間に
冷蔵庫から冷凍チャーハンを取り出し、レンチンで温める
時間ができた零は、ソファに座りゆったりと過ごしていた
「あちゃ…あとで買い物行かないと…」
テーブルに置いてあったメモ帳を書き写し、今日買うものをメモっていく。
書き終えたあと、キッチンに向かい温めたチャーハンを皿に入れて
味噌汁も取り出し、それから風呂場に向かいお湯をためないく
再びリビングへ戻り、昼飯を食べようとすると
誰かからピンポンと音がなる
「誰だ？」
郵便でもなく、仮に友達が来るわけがないと思いつつ
零はそのピンポンの画面を見る。
銀の色をした長い髪をした少女がいた。
「…湊先輩？
あれ、忘れ物したっけ？」
考えているうちにボタンを押してしまい
友希那の声が零の所に響く

「零」
「あ、はい？」
友希那の手には教科書を持っていた
零はしばらく考えたあと、急いで帰った時に忘れたんだと思い出す
「ありがとうございます。
…えーと？中に入ります？」
画面越しにいる友希那は首をゆっくりとコクリと頷いて
零は玄関へ向かい、鍵を開け。中へ入れさせる
制服が少し濡れていたため、友希那にお風呂に行かせる事にした。
「服は…これでいいかな」
姉の部屋から服を借り、お風呂場にいき扉を開けると
タオルで身体を巻いた状態の友希那の姿を目撃してしまう
「…ち、違うんだ…こ、これには…」
「…服置いて？」
言われがままに零は目をつぶりながら、服を置き
風呂場を後にする
「(湊先輩…胸結構出かかったような…っとと…リビングに
戻ろう)」
リビングに行き
彼女の分の料理を作る。
出来上がったタイミングで友希那がリビングへと入ってきた
「お風呂、ありがと。
…あら、いい匂いね？」
「まー冷凍で作ったご飯だけど
頂いてください。」
そう言って、零はテーブルの上にご飯を置いて
友希那はその場所へいき、座る
「ご馳走さま、美味しかったわ」
「それは良かったです
食器片付けますので、先輩はくつろいでください」
友希那が食べた、食器を持ちキッチンで洗い物をする零

友希那はソファに置いてあった雑誌を見て時間を過ごしていた
「ふう、終わりっと
友希那先輩、何か飲みます？」
「え？あ…じゃコーヒーで」
「わかりました（確か砂糖入れないとダメだっけ…）」
零は棚に置いてある砂糖を取り出し
コーヒーが出来上がるのを待った。
数分後…
「おまたせしました」
テーブルにコーヒーを置き
零も友希那先輩と同じソファに座る事にし
一緒に飲む事にした。
「頂くわ」
「砂糖入れてますからどうぞ」
お互いにコーヒーを飲み始める
ゆっくりしているとインターホンから音が鳴る
「あら、誰か来たのかしら？」
「ちょっと見てますね」
零は、ソファから立ち上がり
インターホンに向かう、そこには用で来れないと言われた
赤いメッシュを入れている少女、蘭の姿が見えた。

やばい…どうしよう

零の家　リビング
蘭が家に入り、リビングには友希那先輩と鉢合わせてしまう
そして、今現在…
二人の目線には火花がチラチラと飛んでいた。

「美竹さん…貴方今日華道があるから
来れないと聞いていたわ？」
「あると思ってたんですけどね
今日ではなくて来週だと事に気がつきましてですね…」
「そうなの？」
「そうです
それに、なんで湊さんが零の家に居るのか説明してください」
噛み付く蘭は友希那先輩の目をしっかりと見る
それでも表者を一切変えない彼女は一言、蘭に理由を言った
「教科書を忘れたみたいで、それを私は零に届けに来ただけよ？
それに来る途中で濡れていたからここでシャワーを借りただけ」
「そうなんですか
…湊さん、いつから零の事「君」付けにしなくなったんですか？
学校で会うたび何度も口にしてたと思いますが？」
「あら、私だって君付けにしようがしないがは
私が決める事よ？
文句があるのかしら？美竹さん？」
「うっ…」
蘭が押されている表情をしていた。
零は考える。
どうしたらこの気まずい状況をかえるのかを
「（どうしよう、二人が落ち着きそうな物…
うーん？お茶…？）」
「あのー？

蘭、それに先輩」
二人は声を揃えて零に「何（かしら？）」
と口調を合わせた。
「丁度いい時間なんでお茶にしませんか？
ほ、ほらたまにも休憩も含むのもありかと」
『…』
「（何を馬鹿な事言ってるんだーー
俺はーーーー!?）」
「良いよ、零
お願い」
「え？」
「そうね、せっかくだし零にお言葉に甘えさせて貰いましょうか」
「（いいんかい！）
あー？じゃ持ってくるので少しお待ちを」
零は台所に行き、冷蔵庫の中身を確認する
中にはショートケーキやプリンなど入ってる事を確認し
トレイの上に乗せて彼女達の元へ運んでいく
「持って来ましたよ」
テーブルに置かれる
ケーキやポットなど起き、トレイを床に置いて零もその場に座る
すると
「あら？零？
座らないのかしら？」
「え？いやだって
流石に女の子の隣に男が座ったら駄目かなー？と思いまして」
「零、だったらアタシの隣に座る？」
「いや、聞いてたよね？」
「何を気にしてるのか分からないのだけど
そんなに駄目なのかしら？零」
二人の質問攻めにされて
零は戸惑っていた

「(どっちも座っても良いんだけど…どうしよ
友希那先輩の所に座ったら、間違いなく蘭に殺される
逆に蘭の所に座ったらそれはそれでどの道殺される気が…)」
冷や汗をかきつつ、考え込む零
二人の目線が零に向けられていて
その結果
「…だったら…」
数分後
ソファーをなんとか動かして繋げた零
真ん中に座り、左には蘭、右には友希那先輩が並び
共に零が出してくれた、お茶を頂く事になった
時刻は夕方の6時だろうか
あたりは真っ暗になっていた
「あら、もうこんな時間なのね?」
「そうですね」
「ん…帰るの?蘭」
「そうだね、明日も学校出し
そろそろあたしも帰るよ」
「そうね、それじゃ零。
私も帰るわ」
友希那先輩はソファの横に置いてあった鞄を持ち
玄関へ向かっていく。
「分かったよ、蘭。友希那先輩」
零はソファから立ち上がり
玄関へ向かうとすると背後から蘭に声を掛けられる
「ネェ?」
「!」
とっさに零は蘭の方へ向く
蘭の目からにはハイライトが消えていた
「…今後、湊さんを家に上らせないように…ネ?」
小さく呟いた声はとてもじゃないけど

こう、殺気を感じるような言い方だった
「…わかったよ…蘭」
恐怖に少し動揺した零
蘭と一緒に玄関まで見送り
二人とお別れを告げて帰っていった。
友希那サイド
「…美竹さん？」
「…なんですか？湊さん？」
その場で立ちどる友希那と蘭
なんだが雰囲気がいつもと違うと感じた蘭は息を飲むように
視線を彼女の方へ向く
「…あなたが零と付き合ってることは知ってるわ
…だけど、諦めなさい」
「…は？どう言う意味ですか？」
「…貴方の零は…」
ワタシガウバッテアゲルカラ　ネ？
その瞬間、蘭は友希那先輩が零の事を狙ってる事を
今、初めて知るのであった。

新たな、ライバル

前に、蘭と湊先輩が。
僕の家に遊びに来て、二人の目線から火花が差し込んでいて
とてもじゃないが、命の危機を感じた。
それから数ヶ月が経ち、夏休みまでもう少しの所で
これまで何があったのかここで説明しよう
蘭と湊先輩が家に帰った後の話
「ふぅ…疲れた…流石に蘭が来た後どうなるかと思ってたけど
なんとか、収まって良かった…ん？メールが届いてる誰かだろう？」
メールを見ると、そこにはいつ、メール交換したのか
わからないが、差出人が湊先輩からだった
「ええ？
いつ、交換したっけ？
蘭からもらったのかな？」
内容はこう書かれていた
湊
今日は、家にお邪魔させてもらって
ありがとう。
今度、貴方の好きな甘いものでも持って来るわ
それでは、また学科で会いましょう？
友希那より
「今日のお礼の事だね…ん
まだ、続きがある？」
さらに下の方まで見ると
恐ろしい言葉が書かれていた
近く女はワタシが守ってアゲルカラ、ネ？
安心シテ、レイ…
友希那より　ＥＮＤ
「…な、なにかのイタズラでしょうかね…あはは…」

湊先輩に返事を送ろうとしたが
家事の方を優先にして、あとで送ることになった。
翌日　　羽丘学園　校門前
朝から何かと騒いでいて
生徒達の周りには、何かを見ていた
僕はそれを間に入っていき
その様子を見ると
蘭と湊先輩が何かを言い争っていて
隣にはリサさんやモカなどいて
落ち着かせるようにと説得しているようだった。
「えーと？何があった？モカ」
「あーれいさん～
いやー実はですね～」
モカから事情を聞くと
蘭は友希那に挑発をされたからと理由で
噛み付いている状況で、それで湊先輩は説明をしてるのだが
それでも聞いてないらしく、リサさんが蘭に話をつけていたとの事
「れいさんは止めにいかないですか～？」
「あ、うん。
そうだね。」
その後、なんとか二人を引き離し
学校のチャイムが鳴り
急ぎ足で、それぞれの教室へ向かっていく
時はお昼頃の出来事だった
羽丘学園　屋上
「零？
これ、何？」
ポケットに入れていたスマホをいつのまにか蘭の手にあり
俺は、蘭に質問攻めされた
「えーと…その…
湊先輩から、メッセが来て、返事送った感じですかね…」

「ふーん？（やっぱり、あの時言った事、本当なんだ…気をつけとかないとね）
あたしが前に言ったこと覚えてる？
ほかの雌豚共には、関わるなって？」
たしかに、言われたなと、思い返すと
蘭はため息ついた後に。目のハイライトが消え
周りの空気が凍りつく感覚になる
「ネ？ドウシテヤクソクヤブルのカナ？
アタシはレイノコト心配してるんだから…ネ？」
片言で話しながらも普通に話す蘭を見て
俺はなんとか蘭の機嫌を直そうと
ある事を蘭に伝えた
「ほ、ほら
今度から夏休みだろ？
一緒に海行こうか？ね？」
その言葉に反応したのか
蘭の目からハイライトが戻り
顔を赤くして目を逸らした
「れ、零がそう言うなら…いいよ
今度の休みの日に行こ？」
「ああ！みんなッ！」
最後まで言うとしたが
蘭に顎を掴まれて、また、目のハイライトが消えて
声のトーンを落とし
この先言ったら殺すよ？という殺気を感じたため
蘭に謝った。
「すみませんでした！」
「今度から気をつけてよ？
…あ、モカからだ。
すぐにこっちに来るってさ」
しばらくして、モカ達がやってきて

お昼ご飯を頂く事になりました。
だけど、まさかこの会話が聞かれていたとは思わなかった
のちの事件に巻き込まれるとは
その時の俺はまだ、知るよしもなかった

???視点　　???の家
「よーし!できた♪」
「うるさいわよ…ってこれ…何を作ったの?」
「んー?これはね~♪
内緒だよ♪」
「そ、そうなのね何に使うかは貴方が決める事だけど
迷惑にはかけないようにね?」
「はーい♪
ご飯頂こ?♪」
彼女の手には怪しい薬瓶をポケットに入れて
食卓に席に着き、ご飯を頂いた。

日菜　零　始めての…

零視点

蘭と夏に海に行こうという話をしてから数日が経ち
もう少しで夏休みに入る。
そんな中、放課後。
蘭は用事があるという事で先に帰って行き。
僕は教室でカバンの整理をしていると、日菜先輩が教室に入ってきて。
いきなり家に遊びに来てと言われ、放課後
僕は先輩の言われがまま、家に遊びに行く事になった。
氷川の家
「ネェ？」
日菜に話しかけられて僕は振り返ると
光のハイライトをなくした状態で、こちらに見つめていた
「どうしたんですか？日菜先輩？」
と、名前を呼んであげると
突如、日菜に床に押し出されて、必死にもがくが
身動きが取れない状態でなった
「グッ!?ひ、な先輩ッ!?」
そのままの勢いで日菜は僕の口にキスをして
舌を零の中へと侵入して、ある物を飲ませた
「〜〜〜!!
ぶはぁ!?
日菜先輩、何を!?」
「ふふん♪
内緒ダヨ？
それよりもさ？ナんで
アタシのことヒナって呼ばなイのカナァ？」
さっきまではハイライトがあったが
また、光が差し込んでもない目つきをしていた

「いや…その…」
まずい、逆らったらまたあの痛みを味わう。と
脳裏が蘇り、僕は日菜先輩に従う事にした。
「ひ…な」
「ん～？聞こえないなー？
もう一回言ってみてくれるかな？」
「日菜」
やっと名前で呼んでくれたのか
嬉しかったのか、日菜は目をキラキラと光らせた表情をしていた
「やっと、あたしの名前呼んでくれた、ネ？れーい♪」
「…」
僕はそのまま気を失った
次に目が覚めたのが外が暗くなってきた頃の時間だった
「あれ、寝てたのか…それにいい匂いする…」
目をこすりながら辺りを見回す
どこかで見覚えのあるようなベットを見ながらふと、思い出した
「ってここ!?
やばい、いつのまにか寝ててそれから先輩のベットで!?」
慌てながらも、なんとか気持ちを落ち着かせて
深呼吸した後、日菜先輩の姿がなかったので
下に降りていきリビングへ向かっていく
リビング
「日菜先輩…います？」
「あれ？おはよう
どう眠れた？」
キッチンで何かを作っていた
日菜先輩がこちらにやってくる。
「眠れたって？
え？さっき変なの飲まされたのって…」
「んー？あーごめんねあれ
睡眠薬なんだ、なんか零、眠そうな顔してたからさ」

「そうなのですか、良かった…変なの飲まされたわけじゃなくて…」
「デもね？零クん？」
日菜先輩の雰囲気が変わり
ゆっくりと近づいてくる
壁まで追い詰められた僕は息を飲むようにと、冷や汗をかいていた。
「ナンデ、他の女名前出すの？
前にも言ったよネ？」
身に覚えもないし、ましては日菜先輩の前では口にすら言っていない
もしかしたら、気付かないうちに言ってしまったのかを考えたが
直ぐには答えは出なかった
「と、とりあえず日菜先輩
落ち着いて」
「…また、話を晒すんだ…
ヘェ…？」
冷たい発言をする日菜先輩
僕は冷や汗をかきながらゆっくりと唾を喉に通し
「いいヨ」
そう言い、彼女の目からハイライトが戻り
笑顔で「ご飯食べていく？」とそう答えるのであった。
しばらくして…
「えー！もう帰っちゃうのー！
いーーやーーーだーーー！」
ここに来てわがままにされても
明日学校あるからと必死伝えるが
それでも離してはくれなかった。
その後、紗夜さんが帰ってくるまではずっと日菜先輩にくっ付いていた。
日菜視点
零が、自分の家に帰ったあと

アタシは、今日の出来事を思い出していた
「(零の始めて、アタシが貰ったちゃったよ～♪
でかいし、蘭ちゃんや友希那ちゃんには悪いけど
アタシの物だからネ～零は♪)」
彼女の机に置いてある。紫色の薬びん
そこには以前に作っていた零専用と、書かれていた文字があった。

嘘だろ…おい

零の家

「ん…今…何時だ？」

目をこすりながら時計を見つめる

針の刺す先には6時の時間が経っていた。

「…寝すぎたか…

わぁ…起きよう」

休みだからってお昼寝をしていたら夕方になっていたこと

良くあるなと思いつつ、俺は部屋を出て行き

リビングに辿り着く。

「…あれ？なんで？」

ふと、気が付いたのは。

昼前にはなかった、テーブルの上にケーキを入れる箱が置いてあった。

「…母さんが置いたのかな？

あとで連絡してみよう」

やることは、お風呂を、入れに行き。そのあとに

キッチンに行き、夕飯を一人分を作ることにした

今日は、親は親の友達と温泉旅館に行っているため

一日帰ってこない。

そのため、家にあるもので料理をすることになった。

「良し、出来上がり

っと、しまった風呂どうだっけ？」

急いで風呂場に行き

お湯を溜めていく。

だが、なぜか音が鳴らなかった。

なぜだろうと思い一度調べるが

どうやら設定をいじくったままの状態であり

すぐに戻した

「…ん？

そういえば1日家にいたけど、一度もいじった記憶ないよ…？」
記憶を振り返りながらも
あれ？どうだっけ？と考え込むが
結局は考えても時間の無駄と勝手に納得して。
キッチンに向かい、ご飯を頂くことにした。
数分後。
食器を片付けをしながら、ＴＶの音を聞いていた
が。突然とＴＶが真っ暗に消えて、驚いた俺は
「えっ!?
嘘、切れたの？」
慌ててコンセントの方に向かうが。
切れているわけじゃなかった。再びコンセントをはめて。
テーブルに置いてあったリモコンをいじり
再び、画面に映像が映る。
「…まさかな」
片付けを終わらせて
俺は風呂場に向かう。
服などを全部脱ぎ始めて。
湯船に浸かる
「はぁ…1日寝てると身体がだるい…
それにしても…」
夕方から、気になっていた事を頭の中で考えていく
「（まず、ケーキの箱だけど
あれは母さんが置いていくわけじゃない
旅行に行ってるのに、家に帰って置くなんて不可能だ。
仮に連絡来るとしたら、親からメールがあるはず。）」
「（それと、二つ目は
風呂のリモコンだが、俺は朝から設定を変えたわけじゃない
それに変えたとしても音が鳴らなくなる設定まではしないはずだ
寝ぼけてて、設定をいじくったって可能性もあるが
俺は昼寝をしてたわけだから、わざわざ行く理由なんてない）」

「…まさか…誰か家に入ってきて
ずっと監視されてる…？だとしたら調べてみるしかないか？」
そう思い、風呂場から上がり
服に着替えて、早速部屋の中など調べる
何十分経っても見つからなかったため。
気のせいかと思い、一度ソファに座り込む
「…やっぱり気のせいだったのかな。
って…やべ、もうこんな時間か？」
ふと、時間を見ると１０時の針が差していた
「寝なきゃな。」
そう思い、洗面台に向かい歯を磨き
廊下に出て、二階の部屋に戻ろうとした
その時だった
ガタッと、誰もいないはずのリビングから、音が聞こえて
俺はそっと、リビングに向かい。ドアを開け部屋を覗く
「…誰もいない…？」
恐る恐る、音を立てずに
部屋のあたりを見渡す。
…誰かの気配が感じるが。どこに隠れてるかなんて
そこまでは考えていなくて、すぐさま部屋に戻って鍵を掛けた
「泥棒だったら見つかった瞬間に殺されてるよな…？
…ってなんでそこまで考えずに自分の部屋に逃げ込んだんだよ俺」
今更後悔しても遅いと思い
しばらくして、ドアを少し開けて様子を疑う
ガタガタと走り込む音が聞こえて。
扉が開く音がした、どうやら犯人は
外に出たようだった。
「…出たかな…？
はぁ…なんか、疲れた。
今日は寝てよ。明日学校だしな…」
ベットに潜り

寝ることにした。
だけど…
ガチャ…と扉が開く音が聞こえて
俺は一瞬ビクッと震えていた。
「(嘘だろ…おい)」
少しずつこちらに近づいて来る恐怖に俺は
布団に包まっていた状態でいた。
もうだめだと、覚悟を決めて。
パシッ!と布団を取られて
俺は一瞬だけその人を見た。が
すでに何かに切られた感触が残り
下を見つめる。
「あ…あ…」
それは、自分の首から赤い液体が流れていた
痛い、必死に血を止める布を探したが。
どこも見当たらない。
そして、その人は俺を見て、一言何かを呟いた
「さようなら、零」
その瞬間、俺は意識を失った。
蘭の家
「うぁぁ!?!?!?」
「!?
ちょっと零?大丈夫?」
大きな声を上げて
隣にいた蘭までも驚かせてしまい
挙句には心配する蘭の姿があった。
「はぁ…はぁ…
いや、大丈夫だよ蘭
気にしないで」
「嘘、こんだけ汗かいてる
ちょっと待ってて、今、水持ってくるから」

そう言い残して、蘭は水を取りに部屋を出て行く
近くにあった自分用のタオルで顔をふく
「…なんだったんだろ…あの夢
それに、さようなら…ってどういう事だ？」
しばらく考えたが、そう簡単に
答えは見つからなかった。すると蘭が戻ってきて
ペットボトルの水をこちらに渡した。
「さんきゅ、蘭」
「良いよ。
それより大丈夫？」
「大丈夫ってさっき言ったけど
…そんなことより、俺ら何してた？」
「忘れたの？
一緒に勉強やろうって誘ったあたしがきっかけだった事」
「あー？そういえばそんなこと言ってたな…
途中で寝てたって事か」
「今日はやめにする？」
「そうだな、明日から夏休みだし
そうさせてもらうか。」
蘭は首を頷き
俺は帰る準備をして。
そのまま蘭の家の前で手を振り、帰っていった。

夏の学校へ

夏休みに入ってから、俺は蘭と一緒に勉強を始めていた
時にはＡｆｔｅｒｇｌｏｗとどこかへ遊びに行ったりした。
あ、もちろん他の人と関わると蘭がやばいとわかっているため
変な行動を起こさない限りは大丈夫の…はず。
７月の後半頃
ある人からメールが送られてきた
差出人は湊先輩からだった
「えーと、なになに…えっ!?
…いや…ちょ…えぇ…」
内容を確認して、俺は家を出る
時刻は夕方、日が沈む頃の時間帯だ。
「急ごう」
架け橋で、俺は湊先輩の所へ向かっていった
待ち合わせ場所に着くと
そこには湊先輩や、もう一人は、確か幼馴染の今井先輩がいて
それに気が付いた、先輩が手を振りながらここだよーと。
アピールをしていた
「はぁはぁ…き、来ましたけど…」
「遅かったわね」
「ええ…って
これでも早く来たんですよ…
それより、湊先輩。一体どういう事ですか?これ」
メールを先輩に見せた
その隣にいた今井先輩もその内容を見る
「…書いてる通りよ
…一緒に教科書取りに行かないかしら?」
「いやいや!?
次の日に取りに行けばいいじゃないですか!?」
すると、横から今井先輩が話の間に

入ってきて、俺と湊先輩はそちらに視線を向ける
「いやー明日から学校閉まるらしいから。それにね
アタシや、友希那は明日予定入ってるから今日しか来れなくて
だからね、その間に取りに行かないと次に開くのが夏休み後になっちゃうんだよね。それでね、アタシも付いていくつもりだったんだけど
幽霊苦手で…」
「よーく、わかりました
ですけど、幼馴染なら、今井先輩に。見せてもらうのは？」
と、言っていると二人は顔わ合わせていて
あ、これは…と確信を持ったのは今井先輩の口からだった
「あはは…実はアタシもその教科書忘れてた
…って最初に言っとけば良かったかな～なんて…」
「…はぁ…どのみち逃げ場なんてないって知ってましたよ
わかりました、俺も行きますので。」
「ふふ、頼もしいわね、零
それじゃ早速教科書取りに行きましょうか？」
こうして、俺。
湊先輩今井先輩と共に二人の忘れ物を取りにいく羽目になり
のちに、まさかある体験をする事になろうと
まだ、知る由もなかった。
夕方　羽丘学園　校門前
「…来ましたけど」
「ちょうど良いわね
零、リサ。行くわよ」
「了解♪」
そういう湊先輩は先に一人で行き、その後を追いかけていくように
今井先輩も後を追っていき
その姿を見た俺はその二人と一緒についていった。
羽丘学園　２年Ａ組
「あったわ。

ありがとう、リサ。零も」
「よし、それじゃ帰ろっか」
目当ての教科書を見つけた湊先輩達は
教室を出て行く。
それをなにかを思い出したのか零は声を上げて、立ち止まった
その声に反応して湊先輩達はこちらに視線を向く
「どうしたの？零？」
「あははすみません
教室に大事なプリントが机にある事思い出しましてですね
すみませんが、先に帰ってもらっても構いません」
そう言って零はその場を立ち去ろうとしたが
ガシッと。肩を掴まれて恐る恐る後ろを振り返ると
真顔…というべきか。表情が怖い湊先輩が零の右肩を片手で押さえ込んでいた
「私も行くわ」
「え？しかし…」
「じゃアタシもついて行くよ
流石に友希那と零だけで行くのも危ないと思うし」
「…そうね。３人なら安全だと思うわ」
「あ、ありがとうございます」
頼もしい先輩？
というべきだろうか。
今はそんなとこを気にしてはいけない
俺と湊先輩を二人きりにさせると危ないという事と
大の幽霊嫌いの今井先輩を一人に置くわけにはいかなかったためだ。
零視点　　１年Ａ組
自分の机の中にプリントを見つけて
一安心した後。廊下で待っていた
先輩達と合流し
３人で帰ることになる事に

「わざわざすみません
自分なんかのために」
「別にいいよ
困ってる後輩が居たら人助けするのが先輩だしさ♪」
「リサ、それはいいことだと思うわ
その調子でベースも頑張って頂戴」
「はーい♪
おっ、そろそろ出口だよ。でよう…」
扉を開けようと今井先輩は扉の取っ手を持ちグッと押そうとしたが
なぜがピクリと動かなかった。それどころか
鍵も掛かってないはずなのに鍵が掛かっている状況に、おちいていた
「…開かないって…う、嘘だよね…」
涙目になる今井先輩
それを隣で支える湊先輩。
俺は他に扉が開いてないかをチェックするが。
どこも閉まっていて開かなかった。
「…他に出口ってありましたっけ?」
「…確か、体育館の非常口の扉は鍵が掛かってないはずよ
そこまで歩いて行った方がいいと思うわ」
「だったら早く行こ!ね!?」
「とりあえず離れないようにいきましょうか」
こうして、俺。今井先輩。湊先輩は
体育館にある非常口の扉まで歩いて行く事にした。

今日も何処かで

夜の学校、体育館裏まで着た友希那達。扉は開いていて、出ようとするとどこからともなく声が聞こえた。とっさに驚いたリサは零の右腕に抱きついた。一瞬だが、友希那の殺気がこちらまで伝わった気がするが今は振り向かないようにした。

「いやぁ…流石にもう二度と行きたくないかな…あはは」

「り、リサ先輩…離してくれませんかね？痛い」

リサも気付いたようで慌てて零と距離を取る、手を合わせてごめんねと彼女の姿を見て零は小さなため息をついた。

「いいですよ、湊先輩も今井先輩も無事で何よりですから

それよりも早く帰りますか。」

「さんせー??友希那？帰るよ」

友希那の目は零を睨め付けるような感覚でずっと見ていた

リサ自体は気づいてるのかわからないが、あの時から友希那の目には正気がなかった、つまりずっとリサが邪魔だっただろうと、零はそう思っていた。夜の帰り道、右にリサ、左には友希那がいた3人は同じ方角だったために途中まで一緒に帰る方になった。

「じゃ俺はこっちなので、お気をつけてください」

「うん、零またねー」

「零」

「ん？」

友希那は、零の耳に言葉を発した

「リサに抱きつかれて、良かったのかしら？ネエ？零？」

普段見せない湊先輩の声、零は冷や汗をかくが、まさかと答えた

半信半疑で目つきが変わるが、そう。と言い残してまたね。と言って

リサと一緒に帰っていった。

「…」

零は暗い夜道の中一人で家に帰っていった、するとスマホから連絡が来たようで、ふとその内容を見ると、蘭からのメールだった。

そこには明日、午後にバンド連があるというので午前に会えないか？という内容だった。
「明日は…特に予定はないな。えっと大丈夫だよっと」
メールを、送信した後数秒もたたないうちに返信が来る
蘭らしいメールの内容であり、零は遅めの帰宅をした。
友希那サイド
夏休みの宿題を学校に忘れてたまたまリサがいて、二人で行く予定だった、けど二人だけで行くと何があったら困るとリサがいい。零に連絡を入れた。零は美竹さんといる方思っていたけれど。どうやら先輩の頼み方には断れないようで、来てくれる感じだった。
私は心の底から喜んでいたかもしれないけど、一つ気に入らないことがあった。それはリサがいるからだ。私が彼のことが好きだと言うことはまだ知らない、知ってもらっても応援するだけなのか？と思っていたけど、それは本人にあって行動で起こすことに決めた
私達が通う学科には都市伝説がある、その中で有名なのは鍵がかかってないのに開かない現象がありそこで私は怖がるふりをしようとした
けど、そんな簡単にはいかなくてリサがいつのまにか零の腕にしがみついていたからだ。
その瞬間を見た私は嫉妬でリサと零のことを見つめていた
どうしてリサが零の腕をしがみつくの？ネエ？
私だけのレイナノニ！ドウシテ…ドウシテッ!!
そんな感情ばかり込み上げていた。
「…（渡さない…美竹さんやリサには…零を…奪わせはしない…！）」

始まりの季節、新たなる出会い。そして修羅場

明日から二学期がはじまる
楽しみだなーって思いながら今日はｃｉｒｃｌｅに足を運んだ。
蘭が湊先輩達と台パンするらしく、その付き添いだ。
蘭が前からおかしくなったのは俺の原因でもある、それはわかってる
わかっているんだけど、どうも湊先輩や日菜先輩が近くにいて、蘭の目が光なく、獲物を狩るぞ？って殺意がこちらまで伝わってくる
怖いよ…と思いつつ、ある程度距離を離れつつ、時に会話をしたりして
バランスをとっている状態だ。ちなみに…蘭にはまだ知られていないと思うけど、湊先輩と日菜先輩はあくまで恋人（友達）として
見ているつもりだ。
「零、次はあたし達の番だから。見てて？」
「あ、うん。楽しみにしてるよ」
「…湊先輩にはマケないから」
目のハイライトが戻りバンドモードに入った蘭の姿、ｃｉｒｃｌｅでのライブは何度か見ていたが随分と気合が入っていた
ステージ側から見たら僕たちはお客さんだ、見ていた観客席に戻ると
湊先輩と日菜先輩がいた。日菜先輩は相変わらず能天気で丸山？さん達をいじっていた。湊先輩はこちらに気づき、近づこうとするがリサ先輩が押さえていた、常に目のハイライトがなく。僕は少し離れた
そして、ＡｆｔｅｒｇｌｏｗのＬＩＶＥが始まった。
観客席や、僕や、ほかのバンド仲間達も盛り上がっていた。
時間は過ぎていき、ＬＩＶＥが終わり、しばらく暇になった僕はｃｉｒｃｌｅの外でカフェを楽しんでいた。
「うん、美味しい。やっぱここだね。」
「零」

振り返ると蘭の姿があった、ギターケースをかけており。
巴達は蘭と別れて帰っていったようだ。つまり久しぶりの蘭と二人きりだ。
「ほかのみんなは？」
「ん…まだ反省会してたからあたしたちはすぐに終わってね」
「なるほどね、でもバンドの時良かったよ蘭の歌声」
蘭は目を逸らし、頬が赤くなっていた。どうやら言われた事が恥ずかしいご様子だった。日が沈むこの時間帯、住宅地で蘭と別れたあと
僕は、近くのお店へ寄った後、自転車での帰り道
「ん…あ、桜。夜の桜は綺麗だな…」
桜を眺めているとどこからか音が聞こえて、その音が聞こえる所まで歩いていくと、黒髪でクールな女性の人がバイオリンを弾いていた
その音に惹かれ、聴いているとその人はこちらに気づき音を止めた
「…なにかしら？」
「あ、す、すみません。つい綺麗な音が聞こえたので…」
「そう、別に構わないわ、本当は効率悪いんだけど」
「そ、そうなんですか」
とてもクールな女性なのだが、どこか雰囲気が怖く。話が詰まってしまいなかなか会話ができない状態だった。長い沈黙のゆえ、女性の方から声をかけられた
「あなた、またどこかでお会いできそうね？」
「え？」
「…またね、れーちゃん」
女性は、そう言い暗い夜道を歩いて帰っていった
「…えっ？えっ？えっ？」
一つ疑問が残っていた
「…昔の呼び名だけど…えっと…誰？」
昔の記憶がなかったそれところがすごく懐かしくて、だけど名前が思い出せなかった。そしてそう考えてるうちに家に着き。夕食の済ませて
次の日を迎えた。

新学期を迎えてから数日後、バンドメンバーが集まりがあった
その時は僕は蘭達と一緒にｃｉｒｃｌｅに来ていた。
ほかのバンドのみんなも集まっていくなか、見覚えのない５人組がいた
「蘭、あの人達は？」
「そっか、零は、まだ知らないんだっけ？あの人は…」
「Ｍｏｒｆｏｎｉｃａよ」
「今あたしが言うとしたのに。あんたは？」
数日前にあった黒髪の女性が蘭の前に立った
「私たちのバンド名前よ、それに…れーちゃんに近寄らないでくださるかしら？」
「は？れーちゃん？あんたなに言ってるの？零は…レイ？」
話の途中でハイライトを消した蘭。僕の近くにより一通りが少ない廊下に移動させられ、事情を聞いてきた
「レイ？誰なの？答えろよ？」
「ら、蘭。口!!それに僕だって知らない人だよ…！」
「でも相手は知ってるようだけど？れーちゃん？ナニソレ
いつ知り合ったの!?」
蘭は切れていた、目のハイライトがなかった
「す、数日前にでも！覚えてないんだよ…っ！」
「…信じてあげる、零が覚えてない見たいだし」
「少し待ってくれるかしら？」
先程の女性が蘭達の前に現れた
「…何か用？」
「この際はっきり言わせてもらうわ」
「れーちゃんは、昔私の命の恩人よ？だから、奪わないでくれるかしら？」
「は？」
「え？えええええええ!?!?」
そこに現れた一人の女性、新たなライバル出現
新たな物語が、また始まろうとしていた